

## 第13回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020年8月7日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

15:00から17:00までの予定で、文部科学省15階特別会議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。150人前後の人が視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 大学入試に関するWeb意見募集について
2. 今後の議論の進め方について
3. 自由討論

今回も前回に引き続きWEB会議方式で行われ、文科省の会議室からは三島座長が、その他の委員はネットを経由して参加した。事務局より吉田委員は欠席であることが告げられた。萩生田大臣は15:45頃から1時間ほど参加した。

まず、議題1として、資料1-1および資料1-2に基づいてWeb意見募集に関する説明が事務局の武藤企画官よりあった。

大学入試実態調査の項目検討を担当した7名の委員と相談して、意見募集のための項目を作成した。年齢と職業を必須に、氏名や住所などは任意とし、「その他」も含めた8つの観点のうち1つを選択してもらったうえで、意見とその理由に分けて自由に記述してもらう。また、これまでの会議で出た意見を、Web意見募集で設定した7つの観点別に整理して提供することで、意見を提出したい人々に参考にしてもらう。

これについての質疑応答の概要は以下の通りである。

川嶋委員：職業の項目において高校生の保護者であるか否かがわかるようにしてもらいたい。

渡部委員：地域格差の観点を考慮して、意見を述べる人の居住地域の属性が情報として必要ではないか。また、まとめ方やデータの扱い方に関して方針はあるか。

→（事務局）意見が出てきてから考えようと思っていた。意見が多ければまとめる工夫は必要だと考える。

芝井委員：意見は自由に書くのが前提か、あらかじめ会議の概要を読んでもらうことが前提か。

→（事務局）できれば見ていただきたいが、絶対ではない。実際の募集時には参考にさせていただくよう案内する。

末富委員：保護者の属性は任意でもあるとよい。住所を聞くより地方や県などの情報の方

が重要。

次に 15:15 頃より議題 2 として今後の議論の進め方について資料 2 に基づいて益戸副座長より説明があった。

これについての質疑応答の概要は以下の通りである。

芝井委員：共通テストについては 1 月の本試だけでなく、特例追試も含め 3 回分を見てからその状況を踏まえるべき。また、これまでの経緯の検証作業についても最終報告に入れてほしい。

柴田委員：今年分離分割方式は円滑に進められるのか、危機管理体制についてコンセンサスをとりたい。

両角委員：なぜこのような事態になったのかの検証作業はまだ途中の段階なので、もう一度議論する必要がある。ウィズコロナでの入試のあり方の議論は重要だが、どのようなスケジュール感でやるのか。すでに今年の実施要項における各大学の対応はばらばらで混乱している。そこまでこの会議で扱うのか。

末富委員：共通テストについては 3 回目まで含めた状況を踏まえるべき。また、意思決定のプロセスとして透明性を高めるあり方がいかにあるべきか議論すべき。

岡委員：国大協ではこれらの論点についてすでにワーキンググループで議論を始めている。分離分割方式については今後も維持していく予定だが、議論はする。

清水委員：パブリックコメントの項目立てと今後の議論の進め方との関連性で薄い部分がある。同じような柱建てで項目を補強してはどうか。

渡部委員：どの論点を何月までに決めるのかというスケジュールを示すことを希望する。

斎木委員：各大学の個別入試における様々な取組に対する支援・推進のあり方についても議論したい。

山本委員：共通テストの実施状況というのは具体的に何を指すのか。問題内容を分析するのだとすると時間がかかる。

→ (三島座長) どういう課題があったか、どのように行われたかという点を指す。

山本委員：共通テストになって変わったのは問題内容であり、運営体制はセンターのときと変わらない。日程などコロナの影響は入試のあり方とは別の問題。

島田委員：論点は非常に多岐にわたるので、全員で議論を進めるのがよいのかどうか。スピード感を出すためグループに分けて議論する工夫もあってよいのではないか。

芝井委員：「基礎的な学習の達成度の判定という試験の目的」とあるが、それは共通テストの目的とずれるのでないか。表現を工夫してほしい。

牧田委員：全員で一週に議論するよりカテゴライズしてグループでやってはどうか。また WEB 会議は便利だけれどストレスが多い。複数の方での意見交換がしづらいので、対面の場も設けてほしい。

→ (三島座長) やり方については改めて考えて提示したい。

川嶋委員：これまでの経緯の検証は議論をすすめて報告すべき。令和6年度の入試に向けての考え方については早急にある程度の方針を示さなければいけない。共通テストと個別入試のスケジュールの問題も検討すべき。また、大学についてはアンケート調査をしているが、高等学校の意見についても集約して出してもらう方がよいのでは。

萩原委員：主体性評価をどうするかについても議論に入れてほしい。

小林委員：最初に提示されたこの会議の課題に対する答えを検討項目に入れてほしい。検証作業はできることから先にまとめていった方がよいのではないかと。

山本委員：共通テストの目的は学習の達成度の判定ではなく、入学者選抜である。

次に16:15頃より議題3として自由討論が行われた。討論の概要は以下の通りである。

末富委員：受験生や保護者への説明責任のあり方は主要な論点となってくる。また、障害者への配慮などを考えて特別支援学校などの意見聴取が必要なのではないかと。

柴田委員：主体性評価について高校と大学で捉える意味が異なりすれ違いが生じている。定義を限定するべきではないかと。

萩原委員：主体性評価については共通認識が明確になっていない。すれ違いがないように議論すべき。

渡部委員：主体性評価の見方の違いについてももう一度説明してほしい。また、高校でやっていることを全部入試に入れると肥大化してしまう。入試への期待が大きすぎるので、高校でやるべきことは高校でやり、卒業認定試験のようなものがあればよいのではないかと。

萩原委員：大学が備えてほしいと考える力を見るのが入試である。

柴田委員：主体性評価について、高校は学力以外のすべての活動だと考え、大学は学力の一要素として考えている。

川嶋委員：高校ですべきことと、大学・入試ですべきことの仕分けについて、観点の共有は必要。また、この会議では議論する項目が多数あるので、主体性評価に関する議論は他の会議に任せてはどうか。

末富委員：大学の実態調査は過去に類例がないので、今後さらに継続実施していくことが重要である。また、高校生・高校教員の意見が十分に反映されていないので、意思決定の参画のあり方について検討すべき。

芝井委員：大学教育に求められるものが産業界に左右されている。STEM人材などと画一的な目標を作りすぎたのではないかと。英語の4技能もあるに越したことはないが、日本語の読解力の方が最も大事だと思う。また、今回のコロナの影響で文科省からいろいろな要望が出て慌てて実施要項をまとめたが、本来入試は時間をかけてじっくり考えなければならぬものであり、本音を言えばそんなに急に対応できるわけがない。

斎木委員：調査の結果出てくる膨大なデータをどのように扱うか、生データをどのように

分析するか、しっかり取り組む必要がある。

小林委員：各大学はコロナ対策で忙しく、アンケートにまで手が回らない。アンケートではその本音の部分は出にくいと思う。現実の入試では混乱の中で定員を埋めていくもので、予定していたものと現実は異なる。複数回受験でどちらも受かっているケースもある。また、共通テストを資格試験にするという意見も出たことがあるが、それは乱暴だ。私大は自由に選択できるようにするべき。それから、入試の成績と入学後の成績は相関が低いので、本当は入学させた後に選抜する方が大学にとってはよいのだが、入学定員がありそうするわけにはいかない現状がある。

次回の第 14 回会議の日程については調整の上、決まり次第連絡することとなった。